

1. 略歴

- 1977年3月 東京教育大学附属高等学校卒業
1977年4月 東京大学教養学部文科3類入学
1981年3月 東京大学文学部第一類（美学芸術学専修課程）卒業
1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程入学
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程修了
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程進学
1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程単位取得退学
（その間 1987年10月～1988年9月 DAAD（ドイツ学術交流会）奨学生としてハンブルク大学に留学）
1992年10月 東京大学大学院人文科学研究科において博士（文学）取得
1988年10月 神戸大学助教授，文学部（哲学科芸術学専攻課程）
（その間 1990年10月～1991年8月 ハンブルク大学で研究）
1993年10月～ 神戸大学大学院文化学（博士課程）兼任
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（美学芸術学専門課程）助教授
2007年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）教授
（その間 2008年10月～2009年9月 ドイツ連邦政府の招聘によりドイツにて研究）

2. 主な研究活動

a 専門分野

美学・芸術学の基本概念の研究、「感性の学」としての美学の歴史的再構成、18世紀から19世紀にかけてのドイツ語圏を中心とする美学理論の研究、20世紀前半におけるドイツと日本の美学交渉史の研究、および間文化的視点からの美学理論の構築

b 研究課題

第一に、2001年に公刊した『芸術の逆説——近代美学の成立』以来の研究の一環として、美学・芸術学の基本概念の研究に従事している。その一端は2009年に公刊した『西洋美学史』（東京大学出版会）において示した。この書物は、学説史研究の持ちうる現代的な意味を問う試みでもある。

第二に、「感性の学」としての美学を歴史的に再構成し、現代の美学を刷新する作業に携わっている。これは数年後に『西洋美学史』第二巻として結実するはずのものである。

第三に、昨今の「間文化性」への関心の増大に応じつつ、19世紀末から20世紀前半における日本の西洋美学の受容を「間文化性」の問題として扱う可能性を探り、その一端は『木村素衛——「表現愛」の美学』、および共編著である *Kulturelle Identitaet und Selbstbild. Aufklaerung und Moderne in Japan und Deutschland* の内に示した。

c 主要業績

(1) 著書

- 単著、小田部胤久、『木村素衛——「表現愛」の美学』、講談社、2010.9
共著、Tanehisa Otabe、『Gott, Natur, Kunst und Geschichte.』、Wien、2011
共著、Tanehisa Otabe、『Manfred Milz (ed.), Facing Mental Landscapes. Self-Reflections in the Mirror of Nature』、Olms、2011
共著、小田部胤久、『坂部恵——精神史の水脈を汲む』、水声社、2011.6
編著、Tanehisa Otabe、『Kulturelle Identitaet und Selbstbild. Aufklaerung und Moderne in Japan und Deutschland』、LIT Verlag、2011.8

(2) 論文

- 小田部胤久、「美学から見た日独交渉史——グローバル化の三段階——」、『言語文化』、27、13-23頁、2010
Tanehisa Otabe、「"Schoene Kunst muss als Natur anzusehen sein." Zu einer kleinen Ideengeschichte der Aesthetik」、『Internationales Jahrbuch fuer Hermeneutik』、9、pp. 147-160、2010
Tanehisa Otabe、「The Corporeity of Self-awakening and the Interculturality of Cultural Self-awakening: Motomori Kimura's Philosophy of Expression」、『International Yearbook of Aesthetics』、14、pp. 142-159、2010.8

小田部胤久、「魂とその根底——ライブニッツからシェリングまでの美学的言説の系譜学の試み」、『美学芸術学研究』、29、117-133頁、2011.3

Tanehisa Otabe、「Der Begriff der "petites perceptions" von Leibniz als Grundlage fuer die Entstehung der Aesthetik」、『JTLA』、35、pp. 41-53、2011.3

Tanehisa Otabe、「Karl Loewith und das japanische Denken, das in zwei Stockwerken lebt」、『JTLA』、36、2012

小田部胤久、「プラトンからの感性論＝美学の試み」、『美学芸術学研究』、30、2012.3

(3) 書評

秋庭史典 『あたらしい美学をつくる』、小田部胤久、『週刊読書人』、2011年8月12日号、4頁、2011.8

(4) 学会発表

国内、小田部胤久、「感性の理論——美学の立場から」、感性科学フォーラム、九州大学、2010.3.12

国際、Tanehisa Otabe、「Karl Loewith und das japanische Denken, das in zwei Stockwerken lebt」、Das 18. Symposion der Académie du Midi, Ales les Bains、2010.5.28

国際、Tanehisa Otabe、「Karl Loewith and Japanese Thinking That Consists of Two Floors: A Contribution to Intercultural Aesthetics」、The 18th International Congress of Aesthetics、北京大学、2010.8.9

国際、Tanehisa Otabe、「Japanese Aesthetics seen from Intercultural Point of View」、The 18th International Congress of Aesthetics、北京大学、2010.8.10

国際、Tanehisa Otabe、「Der Begriff der "petites perceptions" von Leibniz als Grundlage fuer die Entstehung der Aesthetik」、国際18世紀学会、グラーツ大学、2011.7.26

国際、Tanehisa Otabe、「Der „Grund der "Seele". Ueber Entstehung und Verlauf eines aesthetischen Diskurses im 18. Jahrhundert」、ドイツ哲学会、ミュンヘン大学、2011.9.14

国内、小田部胤久、「ライブニッツからの感性論＝美学——微小表象論の射程」、美学会全国大会（シンポジウム）、2011.10.17

国内、小田部胤久、「美学の生成と無意識」、シンポジウム「フロイトの時代」、東京大学文学部、2011.11.5

国内、小田部胤久、「「無意識」をめぐるヘーゲルとロマン主義——美学（史）の立場から」、ヘーゲル学会第14回研究大会、2011.12.18

国内、小田部胤久、「創造的資本としての近代美学」、シンポジウム「アートのための社会的有用性」、京都精華大学情報館、2012.1.22

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、美学会、委員、2010.4～

国内、美学会、副会長、2011.4～

国内、日本シェリング協会、理事、2010.4～

国内、日本シェリング教会、役員・委員、2011.4～

国際、国際シェリング協会、役員・委員、2010.11～

国内、日本18世紀学会、代表幹事、2010.4～

国内、日本18世紀学会、役員・委員、2011.4～

国際、国際18世紀学会、役員・委員、2011.7～